迷宮探索記録

阿音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷宮探索記録

【Ｎコード】
Ｎ５０２８Ｚ

【作者名】
阿音

【あらすじ】
注意　この作品は二次小説というよりもプレイ日記です。
なので二次小説らしくない内容かもしれません。
そして三人称の練習の為でもあります。
一応縛りプレイですが、緩いのでそう感じないかもしれません。

0話【新たなるギルド】（前書き）

これを見た人はこう思ったと予想します
この作者、また作品増やしやがった……これでまた他作品の更新が遅れるな
いい加減にして、さっさととりあえず1作品でも完結させろよ
……多少違っても、こんな感じに思ったと思います。

本当にその通りでごめんなさい
作者自重しろ、本当に自重しろ……でもしません、ごめんなさい。

なお、この作品の主人公は他の作品と別人です
少しでも期待した人はごめんなさい、別人です。

この作品……というか、プレイ日記を投稿しようと思った理由ですが
世界樹の迷宮の縛りプレイをしたい→どうせなら公開したい→しかし動画とかにする技術も環境も無い→動画が駄目なら文字にすればいいじゃない！→そうだ、世界樹の迷宮なら三人称の練習になるんじゃね？→現在に至る
こんな感じでこうなりました……アホですね、ごめんなさい。

キーワードで気付くと思いますが
この作品でプレイするデータは？のパスワードを使用しています
理由はキーワードの通り、難易度を上げる為です
そしてイベント増加も……まぁそういう事です。

長々と前書きを続けていますがもう少しだけ、そして注意書き
本来、この原作に登場するプレイキャラクターには名前や性格や過去設定は全く有りません

ＴＲＰＧのような作品であり、性格などはプレイヤーが決めたりします
この作品ではキャラクターの性格、名前、過去設定は完全にこの作品でのみになります
なので、この作品のせいでこのキャラがこうにしか見えなくなった！
自分の中のこのキャラをこんなにしやがって！　こんな事を言わない！
など、そのような苦情を言われてもどうしようもありません
自分の中でキャラが固定され、このような作者の自己設定に嫌悪感を覚える場合は引き返すことを勧めます。

世界樹の迷宮風に言うならば
君はこの作品を設定の１つと思い、気楽に読んでもいいし
己の設定を汚されたくないと引き返してもいい。

……以上で注意書きを終わります
縛り内容については後々という事で。

0話【新たなるギルド】

皇帝ノ月1日

大陸の遥か北方に広がる高地
そこには巨大な樹を街の神木と崇める
ハイ・ラガード公国があった。

その公国の神木は世界樹と呼ばれ
その天高く伸びる樹は空飛ぶ城へと
繋がっているという伝説があった。

そんな伝説の樹の中に、
あるとき謎の遺跡群と未知の動植物を内包した
巨大な自然の迷宮が見つかったのだ！

その地を治める大公は、その迷宮を調べ
空飛ぶ城の伝説の真偽を確かめるために
大陸全土に触れを出した。

空飛ぶ城の伝説と広大な迷宮…。
この触れは冒険者達の心を捕らえ
多くの者たちが公国に訪れた。

…しかし、どんなに多くの冒険者が集まろうと、
その迷宮を踏破し伝説を解明する者は
現れなかった。

――この場に立つ少年もまたその布令に応じ、
公国に向かう若き冒険者である。
その目的は一つ、空飛ぶ城を見つけ
富と名誉をその手に掴むことだ。

さあ街の門を潜り進みたまえ！

ハイ・ラガード公国の広場に足を踏み入れた少年は、周囲に騒がしい人の気配を感じ取る
どうやらこの街は、多くの冒険者によって賑わっている街のようだ
元冒険者であり、新たなる冒険を目的にこの街に来た少年はギルドへ向かい、冒険者として登録する必要がある。

しかし、その前に、この少年のこれまでの経歴を確認したい
もしかしたら少年は、これまでに歴戦のギルドに参入していたことがあるのかもしれない
もしそうならば、少年の手元にはかつてのギルドで残した冒険の思い出の証があるはずだ！

あるならば、それを取り出してみたまえ
そこに以前のギルド名が書いてある。

白銀の鎧を着た少年は懐から所々汚れながらも、大切に扱われているとわかるバッジを取り出す
そこにはエトリアのギルド、ユグドラシルと書かれていた。

「……僕、1回も戦ってないんだけどなぁ
ギルドに入っただけで、冒険もしてないし
何もできないまま、他の人がエトリアの世界樹の完全攻略するだなんて……はぁ
こんな僕がユグドラシルのギルドメンバーだったなんて言えるのかな？」

少年は己の存在に疑問を持ちながらも、大切にバッジを襟に付けるどんな気持ちであろうと、彼は己が居たギルドに誇りを持っているのだろう
心なしか、少年の表情が引き締まった。

少年はハイ・ラガードの街にへ向かう橋を渡る
少年は今この時、世界樹の存在する街へ入った！
さぁ、冒険者ギルドへ向かい、ギルドへ登録するのだ！

冒険者ギルド

少年が冒険者ギルドに入ると、そこには多くの人が集まっていた
その中でも重い空気を漂わせている、黒い鎧を着た兵士が立っている
少年はその黒い鎧を着た兵士に話しかけることにした。

「ん……見ない顔だが
かつてユグドラシルに参加していた旅の者が来ると聞いている」
黒い鎧を着た兵士は、兜を被っているせいかくぐもった声を出す

その声は男性のようにも聞こえ、女性のようにも聞こえる。
「どこからそんな話が来たのか知りませんが……はい
僕はユグドラシルのギルドに参加していた者です」
「お前がそうか？
だとするならこの公国に訪れた訳は一つ、世界樹の迷宮の探索だろう」
兵士は頷き、少年を見る
襟に付けられたバッジを見て感心したような声を上げた。
「私も噂に聞いたことがある
エトリアの街を救った伝説のギルド、ユグドラシル
その勇名を再びこのハイ・ラガード公国で響かせるつもりがあるならば……
ここがこの公国のギルドとなる
ここでお前の仲間を集い、冒険に出るがいい」
兵士の言葉から、この者がギルドを管理する者かと思われる
断言はできないが、おそらくギルド長なのだろう
このギルドの全てを仕切っているはずだ。
「それとも、かつての名を捨て
新たな名で冒険に挑むつもりならばそれでも構わない
とにかく、旅の者よ
お前が進むべきギルド名をこの皇帝の月の1日に決めるのだ」
少年は少しも考える素振りも見せず、しっかりと頷く
彼にとって、以前のギルドは誇りであると共に全て思い出である

万が一にも前ギルドの名を汚さない為にも、少年は辛い想いを隠す
そして己の新しい一歩を踏み出す為、新しいギルド名を口にする。

「僕はギルド名を変え、新しい別の名前にします
誰からの望みも受け入れ、温和なギルドを目指したい
みんなが仲間として一致し、協調できるギルド……フロックス！」

少年の言葉を聞いたギルド長は深く頷く
この瞬間、ギルド長の心には少年の存在が刻み込まれた。

「フロックス、それがユグドラシルから新たに変える名か
では、その名を公国全土に響かすよう努力してくれ」

しかし、少年のような者はいくらでもこの国に居るのだろう
例え少年の存在が心に刻み込まれようとも、すぐにその痕は消えてしまう
そうならないよう、少年はギルド長の言う通り、公国全土に名を響かさなければならない。

「では次に、そのギルドに冒険者を登録してくれ
無論、お前自身を登録し、樹海の探索に出かけることも可能だ
君は見たところ、冒険者のようだから先ずは自分を登録することだ」

少年の姿を見たギルド長は楽しそうに言う
いくらエトリアの世界樹を攻略したという噂が流れていようとも
少年自身の見た目はやはり冒険者には見えないのだろう。

それもそのはず
彼自身も先ほど少し言っていたが、彼自身は世界樹の迷宮を探索していない

少年はただただギルドで仲間の帰りを待っていただけである。
ギルド長が笑うのも当然であろう
冒険者の見た目をしていようとも、やはり初心者なのは雰囲気でも判る
幾多の冒険者を見てきたギルド長の目は確かだったのだ！

「さて……ただし、ギルドを預かる者として一つだけ忠告しておくギルドに登録できる人数は３０人までだ、それを考慮して人を集めたまえ」

ギルド長の言葉を受け、少年はギルド長から離れようとする
しかし、その直前にギルド長から声を掛けられた。

「そうそう、ユグドラシルに加入していたお前に渡すものが一つあるユグドラシルの冒険の証ともいえる、とても重要なものだ
この証に相応しい働きをこの公国でも見せてくれる、と期待しているぞ」

そう言われ、渡されたのはエトリアの勲章と呼ばれるアクセサリだった
少年は己の過去を思い出し、少々気まずい気持ちになりながらもありがたく受け取る
少年はギルド長に礼を言い、己が最初にすべき事を思い出す。

「そうだ、最初は自分を登録しないと……」

少年の言葉にギルド長は少々呆れた溜め息を吐く
エトリアの勲章を渡す前に去ろうとしたことを思い出したのだろう
情けない姿を見られた少年の顔は少しだけ赤くなっていた。

「一応説明しておくが
冒険者の登録は、そのままこの国の臣民登記として記録される
つまり、登録した者は必然的にラガード公国の国民となるのだ」

半強制的に国民へ組み込まれる
それを聞いた少年は己の過去を思い出す
自分はエトリアの冒険者……になる直前の卵だった
それなのにハイ・ラガードの国民になり、冒険者になる
一瞬だけ嫌そうな表情をするも、すぐに気を取り直す。

「安心しろ、この国では冒険者の過去は問わぬ
名前とて偽名でも構わん
万が一、お前が他国の貴族であろうと、または何処かのお尋ね者であろうと
ここでは気にもせぬさ、迷宮に挑む冒険者である限りは……な」

ギルド長の言葉に、少年は気付いたことがある
例えエトリアの者でも、元ユグドラシルの冒険者であろうとも
このハイ・ラガードでは誰も気にしないのだ。

いや、最初のギルド長のように気にはするかもしれない
しかしそれも興味を持つ程度、それ以上の価値は無い。

「先ずは、僕自身を冒険者として登録します」

「いいだろう
名を名乗れ」

ギルド長の言葉を受け、少年は直立に立つ

そしてハッキリと、自分の存在を知らしめるように言葉を放つ。

「僕の名はスイレン！
職業はパラディンだ！」

少年……スイレンの名はこのハイ・ラガード公国に刻まれることになった
ギルド長は手慣れた動きでスイレンの名を登録する。

ギルド名　フロックス
メンバー　スイレン

これでスイレンは完全にこのハイ・ラガードの民となった
新たなる冒険者の誕生である！

が、しかし……

「どうした？
他に仲間はいないのか？」

そう、スイレンの仲間にいない
エトリアから来たのはスイレンただ1人である。

「ふむ、なるほどな
お前がどのような冒険をしてきたかは知らんが、忠告しておく
世界樹の迷宮は甘くない、5人パーティでの行動を原則した方が賢明だ」

ギルド長の言う通り、少人数で行っても忽ち殺されてしまうだろうスイレン、君はこのまま迷宮に入ってもいいし、新たなる仲間を捜してもいい。

それを理解しているスイレンは、ギルド内を歩き回る
誰か自分のギルドに参加してくれる者を探すつもりなのだろう。

スイレンがあちらこちらを見ていると、１人の少女がテーブルに座っていた
少女の周りには誰も居らず、とても暗い雰囲気を醸し出している
どうも少女が気になったスイレンは、通りかかるフリをするように少女の正面を横切る。

少女は暗い紫のローブを羽織り、腕が使えなくなるような縛りをした鎖を上半身に巻いていた
胸元には、推測になるが少女の手のひらほどの大きさをした、少し大きなペンダントのような物
そして鎖に繋がれている、ペンダントより一回り大きな鐘が掛かっている
下半身は座っているので見えないが、薄紫色をした髪を肩に掛けるように左右で三つ編みをしている
顔を見る限り、１０歳ぐらいの子供だが、その表情は悲しみで一杯のように見える。

スイレンは少女の表情がとても気になった
彼の所属していた、以前のギルドにも少女のような姿をした者がいた
それがカースメーカーと呼ばれる、呪術師だと彼は記憶している。

しかし、それを理解していてもスイレンは少女が気になって仕方がない

スイレンが少女に近づくと、周りの声が少々ざわめく
少女はどうやら避けられる存在らしい
スイレンはそれに気付きながらも少女に近づく。

「前、座ってもいいかな？」

スイレンは言葉と同時に、少女の返事を聞かずに座る
雰囲気から察したのだろう、返事を聞いてからでも遅いと。

「……他にも空いてる席は有る」

少女は誰とも関わりたくないとでも言いたげに、スイレンに去るように遠回りに言う
だがスイレンは諦めずに少女を見つめる
2人の時間が止まったように、静寂が満ちる。

「「……」」

関わりたくないと言う少女だが、やはりスイレンの存在が気になるようだ
周りからは命知らず、馬鹿、頭がおかしいなど、そのような言葉がスイレンに襲いかかる
少女はそのような言葉を掛けられても動かないスイレンを心配しているようにも思える
だが、もしかしたら単純に人と関わりたくないだけなのかもしれない。

「……何か用？」

「子供が1人で寂しそうにしていたから、気になったんだ

周りの視線も気になるし……放っておけなくてね
だけど、この選択に後悔はしていない
君は何故、1人で寂しく座ってるんだい？」

少女はスイレンの言葉に過敏に反応する
どうやらスイレンの言葉が少女の何かに触れたようだ
少女は小さい声で、感情を押し殺して言葉を発する。

「……寂しくなんてない」

「嘘は言わなくてもいいよ」

少女の言葉を、即座に否定するスイレン
嘘という言葉を聞き、少女は大きく目を見開く
それでも懸命に、感情を殺して話す。

「嘘……じゃない」

「君は冒険者かい？」

突然、スイレンは無関係な事を少女に問う
少女は混乱しながらも、先ほどよりも落ち着いて返事をした。

「……今は違う」

少女の言葉から、スイレンは以前は冒険者だったと予想する
元冒険者、つまりギルドに入っていないということでもある。

「どこのギルドにも加入してないんだね？」

少女は頷き、スイレンに視線を向ける
その視線には警戒と困惑の感情が入り交じっており
言葉にしなくとも、何が目的だと目が言っている。

「実は僕はついさっき、このハイ・ラガードに新しいギルドを設立したんだ」

突然スイレン自身の話となり、困惑する少女
どうやら何が目的でそのような事を言うのか理解していないようだ。

「だけど、今僕には仲間が1人も居ない状態なんだ
迷宮に1人で潜るだなんて馬鹿な真似はしたくないし、できるとも思っていない
まだまだ僕は弱いから、1人だと危険過ぎる」

ここまで話しても少女はスイレンの言いたいことに気付かない
少女の察しが悪いのか、それとも鈍いのか
はたまたスイレンの言い回しが悪いのか……
どちらにせよ、これ以上話を延ばすだけ無意味だと思ったスイレンは本題を言う。

「そこで……君に問いたい
再び冒険者となり、僕のギルドに入らない？」

スイレンの言葉を聞いた瞬間、少女の目が全開まで見開かれる
少女の驚き具合に、スイレンの方まで驚いてしまった
この少女はどのような過去を送ってきたのだろうか？

「誘ってくれるのは……嬉しいけど
私は……もうギルドには入らない」

「理由を訊いても良いかな？」

スイレンは思う、本当はギルドに入りたいと……顔がそう言っていると見たようだ

しかし、少女の周りが彼女に何かをしてしまったのだろう

周りの人間に怒りを覚えながらも、スイレンは少女との会話を続ける。

「……」

「言いたくない？」

頷く少女

おそらく迷宮探索中に何か嫌な事が有ったのだろう

どうやら無理矢理聞き出して良い事ではないようだ。

「なら、これ以上無理に理由は訊かないよ

強引に勧誘とかもしない、無理にされるのは嫌だろう？」

「……」

少女の反応は無いものの、そこはかとなく嬉しそう、そして寂しそうに見える

スイレンと別れるのが嬉しいのかとも思えるが、無理にされるのが嫌という言葉に反応した

しかし1人で居たのだから離れるのも寂しいのだろう

少女の様子を気にしながらも、スイレンは己が大切なことをしていない事に気付いた。

「そういえば自己紹介をしてなかったね
僕の名前はスイレン、新たなるギルド　フロックスのパラディンだ
君の名前を教えてもらってもいいかな？」

スイレンの名乗りはキチンと聞いた少女だが、己を名を問われた時に俯いてしまう
暫く俯いたまま黙っている少女を、スイレンは黙って待つ
やがて覚悟を決めたのだろう、少女は顔を上げ、己の名を名乗る。

「……アイトム」

己の名を名乗った少女だが、その顔からは嫌悪の感情が滲み出ている
どうやらこの名前に、何やら嫌な感情を持っているらしい
少女……アイトムは己の名を吐き捨てるように名乗っていた。

「でも、この名前は嫌い」

アイトムの言葉を聞き、スイレンは頭を働かせる
己の名を嫌う者に、その名で呼ぶできだろうか？
暫く頭を悩ませ、スイレンは有る結論に達した。

「なら、なんて呼べばいいかな？」

少女自身に、自分が呼んで欲しい名を教えてもらえばいいのだ
そうすることで、アイトムが嫌悪する行為をしなくて済むようになる。

「……好きにして」

しかし、アイトムの言葉にスイレンは頭を抱えてしまう

好きに呼べと言われたものの、スイレンはどうすればいいのか判らない
だが唐突に、１つの名前が彼の頭に浮かんでくる。
スイレンはアイトムの反応を伺いつつ
己が閃いた、アイトムの呼び方を伝えてみた。
「僕達はお互いにもっとよく知った方が良いと思う
そんな君にはコーレアという名はどうかな？
「コー……レア？」
少女は己に付けられた、新たな名を確認するかのように呟く
何度も呟き、自身に覚え込ませようとしているかのように見える。
しかしスイレンはこれ以上話しても、少女の心を動かすのは難しいと判断したようだ
もしこの場から去るのならば、己に与えられた別の名を繰り返し呟く少女に一言でも言ってからの方がいいだろう
そう思ったスイレンは、思いついたことを素直に言う。
「これ以上誘うと無理強いになりそうだし、今日は諦めるよ
また明日にでも話さないかい？」
スイレンは言葉と同時に起ち上がる
起ち上がったスイレンを見て、アイトムは慌てた様子でスイレンに声を掛ける。
「あ……あの……」

「どうしたのコーレア？」

アイトムのことを、既にコーレアと呼ぶのが普通のようにするスイレンに、アイトムは喜びを感じる
呼び止めたものの、アイトム自身が意識した事では無いので何も思いつかない
スイレンは何故呼び止められたのか解らず、暫く動きを止める。

「また明日……話してくれるの？」

「さっきそう言った……よね？
明日の同じ時間、この席でまた会おう」

「う、うん……また、明日」

アイトムの言葉に満足したスイレンはアイトムと共に過ごしたテーブルから離れる
その後ろ姿を見て、本人は無自覚なのだろうが、アイトムの顔には悲しみの表情が強く浮かんでいる
人との会話に飢えていたのか、それとも1人が寂しいのか……それはアイトム自身にしか解らない。

スイレンは別の仲間を捜す為、あちこちを見て回る
ふと、壁際を見てみると、1人の黒髪の少女が座っていた
何故テーブルに座らず、壁際にまで行って態々座っているのだろうか？

気になったスイレンは、その少女の下へ向かう
アイトムの件といい、スイレンは落ち込んでいる者を放っておけないのであろう。

スイレンが近づくと、少女は彼の気配に気付き、顔を上げる
赤くなった目から察するに、少女は泣いていたのだろう。
少女を怖がらせない為にも、スイレンは少し離れた場所で屈む
スイレンの行動に、少女は混乱するも、嫌がっているようには見えない
それに安心したスイレンは、少女に声を掛ける。
「どうしたの？」
「……」
やはり初対面だからなのか、少女は答えない
突然話しかけられて素直に話す者も、そう多くはないだろう
だがスイレンは諦めず、再び少女に声を掛ける。
「僕の名前はスイレン
君の名前は？」
「……コバルディア」
スイレンは首を傾ける、少女には似合いそうにない名前だからだ
その少女は弱々しく、名からは強そうにも感じる。
「仲間と一緒じゃなくていいのかい？」
「いいの、私は……戦えないから」
コバルディアの言葉を聞き、スイレンは再び首を傾ける

戦えない者がギルドに居る、それだけでもとても不思議なことだ
このギルドには戦いや宝を求める冒険者ぐらいしか居ない
それ以外の者はギルドの職員ぐらいだろう。

「戦えない？」

「戦いは嫌い……モンスターでも、傷付けたりするのは嫌
そう言ったのに、無理矢理戦わされて……
嫌がったら、臆病者だって、邪魔だから残ってろって……」

小さい声ながらも、コバルディアは少しずつ心の内を漏らしていく
どうやら相当辛かったのだろう、コバルディアの瞳からは涙が零れていく
スイレンはその姿を見て、小さく頷いて決意の表情を見せる。

「なら、僕のギルドに来ないかい？」

「……貴方の？」

意外そうな顔でスイレンを見るコバルディア
正面から真っ直ぐに己の目を見つめられ、緊張していくように見える
コバルディアの言葉に強く頷くスイレンは言葉を続ける。

「そう、僕は嫌がることはさせたりしない
戦いたくないのなら戦わなくてもいいんだ
君は何ができるんだい？」

「私にできること……
傷付いた人を、癒すことぐらいしか……できない」

「十分だよ、僕が君にお願いすることはそれだけでいい
だから僕と一緒に……ギルド　フロックスと共に世界樹の迷宮に行かないかい？」

スイレンの言葉の意味を頭の中で整理し、コバルディアは涙を流す
少女は己の、新しい居場所を見つけたのだ
自分が望まぬことをさせない、優しい仲間と共に……

スイレンはコバルディアを連れ、ギルド長の下へ向かう
コバルディアを以前のギルドから冒険者の情報を抹消する為に
そして、新たなるギルドに登録する為。

「ギルド長、彼女を僕のギルドに登録したい」

「ほぅ？　他ギルドからの引き抜きか
余程条件が良くなければ、そんな事を受ける奴は居ないのだが……
まぁいいだろう
ドクトルマグスの少女よ、君は以前のギルドを辞め、フロックスのギルドに参加するのだな？」

ギルド長の言葉に、しっかりと頷くコバルディア
正面からその力強い姿を見たギルド長は、1枚の紙を破り捨てる
スイレンは紙に書かれたコバルディアの文字を一瞬だけ見る事ができた
その文字から、あの紙はコバルディアの情報だったのだろう
しかし既に破られた今、彼女の情報はこの世界から消え去った。

「ではこれより、ドクトルマグスの少女をフロックスに登録する
少女よ、君の名を言うが良い」

ギルド長の言葉から察するに、新たなギルドに入る時は名を変えられるようだ
確かにギルド長は言っていた、過去を問わず、名も偽名でも構わないと
その言葉通り、ギルド長はコバルディアの過去を全く見ない事と決めたようだ。

「スイレン、貴方が決めて」

「僕が？」

「えぇ、貴方と一緒に……新しい一歩を踏み出したい
その証として、私に新たな名前を……」

コバルディアはスイレンに全てを任せた
スイレンは少し考え、コバルディアに向かって言う。

「君の新しい名は……エウカリス
清らかな心を持ち、純心な姿を見せてくれ」

コバルディアを改め、エウカリスは嬉しそうな顔で頷く
そしてギルド長の方を向き、ハッキリとした声で言う。

「私の名はエウカリス
職業はドクトルマグスよ」

この瞬間、エウカリスの名は新しくハイ・ラガードに刻まれることとなった
フロックスには2人の人間が登録された。

再びギルド長と別れたスイレンは、エウカリスを連れてギルド内を歩く
その瞬間、大きな音が辺りに鳴り響いた。
「私に出て行けって言うつもり！？」
どうやらギルドを追い出されようとしているらしい
気になったスイレンは、エウカリスと共に声の方へ進んで行く。
そこに居たのは喧嘩する男女、合計１０人ほどであった
しかし、怒鳴っているのはオレンジ色の髪の、白いコートを着た少女である
その肩からは大きな黄色のバッグを抱えていた。
コートを着た少女の側に立ち、コートの少女を抑えようとしているのもまた少女である
金色の腰ほどもある長い髪を揺らし、青のコートと帽子、スカートを着た少女であった。
対するは赤髪で、赤い鎧を着た大柄の男性
怒りの感情を滲ませている赤い服を着た金髪の知的な女性
そして困った顔をしている茶髪をオールバックにして、大きな鞄を抱える青年
同じく困った顔をしている茶髪で眼鏡を掛け、肩に赤いスカーフを掛けた少女であった。
他にも数人いるが、話の中心になっているのはこの６人のようである
スイレン達は１度見てしまったせいか、気になって目が離せない
どうするか悩んでいたとしても、時間は止まることを知らない。

「トゥライスだけじゃない、コンフォニオもだ
殴るしか脳の無い暴力メディックも、すぐに錯乱する駄目ガンナーも
もう我慢の限界だ！」

「私達も死にたくないの、治療師であるメディックが働いてくれない
錯乱して味方に当てそうになってしまうガンナーも……
ごめんなさい、私も我慢したんだけど、もう無理なの」

「「……」」

怒る青年と謝る女性、そして気まずい雰囲気の青年と少女
どうやら気まずい理由は、自分が少女達の場所に入ってしまうから
だろう
自分達と同じ職業の２人を見たコートの少女と青い少女は諦めた表
情となる。

既に後任を連れられている以上、これ以上怒鳴っても無駄なのだろう
コートの少女は赤い男性に近づくと、１撃だけ強く殴って去って行く
青い少女も、赤い女性に頭を下げてコートの少女を追いかけて行っ
た。

殴られた男性の口からは血が流れていた
どうやら殴られた衝撃で口の中を切ったらしい
だが、すぐさまオールバックの青年が治療を始めようとした。

「いい、これはケジメだ
俺の治療よりも、これからのことを話すぞ」

それだけ言うと、赤い男性は去って行った
すぐに続く赤い女性に、少し遅れながらも続く青年と少女。

喧嘩を見てしまったスイレン達も、気まずい雰囲気となっていた
あまり見て良いものではなかったからだ。

しかし、スイレンは追い出された少女達の安否が気になり、追いかけることにする
エウカリスはそんなスイレンを追い、後に続く。

暫くスイレン達がギルド内を探すと、テーブルに座っている少女達を見つける
先ほど怒鳴ったせいか、コートの少女は水を自棄になったように飲み続ける
その目の前には落ち込んだ青い少女が座っていた。

放っておけないスイレンは、少女達に声を掛けようとするも
何と話しかければいいのか思いつかない
もし知らずに話しかけたのならばすぐに言葉が浮かぶかもしれないが
勝手に見てしまった手前、話しかけ難いようだ。

しかし、スイレンの存在に気付いたコートの少女はスイレンを睨み付ける
明かに不機嫌の様子に、スイレンとエウカリスは身を固くしてしまう。

「……何か用？
どーせ、さっきの喧嘩でも見てたんでしょ
慰めに来たんだったらお断りよ」

「トゥライスさん、そんな言い方は……」

やはり相当不機嫌な様子のトゥライス
だが、コートの少女がトゥライスということは、青い少女の名はコンフォニオなのだろう
スイレンは赤い男性の言葉を思い出し、そう判断した。

「慰めじゃなくて……追い出されたんだったら僕のギルドに入らない？
僕はスイレン、新しいギルド　フロックスの者だ
まだできたばかりで人手不足、手伝ってくれないかな？」

「お断りよ
どーせ、アンタも私にメディックなんだから治療に専念しろとか言うんでしょ？
私はメディックだけど、治療なんて細かい仕事は嫌いなの
体を動かしている方が好きなのよ、だからメディックを探してるのなら他を当たりなさい」

「私は……自信、無くしちゃったから
もうハイ・ラガードから出て行こうと思ってます
それに、すぐに慌てちゃう私なんて……居ても邪魔ですよ」

トゥライスの拒否と、コンフォニオの辞退
だがスイレンの表情に諦めは無い。

「トゥライス……だったかな？
僕は君に別に治療をしてくれなんて言わないよ」

「何を言ってるの？
さっきも言ったけど、メディックは治療師なのよ
治療しないメディックなんて役に立つと思ってるの？」

「構わない、治療なら彼女が……エウカリスがしてくれる
だから、トゥライスの自由に戦ってくれればいい
僕は決して、君に無理強いはしない」

スイレンの力強い言葉に、トゥライスは怯んでしまう
そして悩む、自分はこの少年を信じるべきなのかを……

「青い服の君はコンフォニオだよね？
君も、自信を無くしたんだったら新しく付けていこうよ
僕は世界樹の迷宮に入るのは初めてなんだ
だから……一緒に頑張らないかい？」

「……私、駄目駄目だよ？」

「僕の方が駄目駄目だよ
だって君よりも新人なんだから」

スイレンの言葉に、コンフォニオの顔に笑顔が灯る
それに釣られ、スイレンも笑顔を見せる
お互いに笑い合い、どちらからか手を出し、握手を求め、受け入れる。

「私はコンフォニオ、ガンナーよ
これからよろしくね」

「僕はスイレン、パラディンだ」

「私はエウカリス、ドクトルマグス
一緒に頑張ろう」

3人で笑い合い、自己紹介をする
そこに、小さい声で別の声が聞こえた。

「……トゥライス、メディックよ」

突然の声に驚き、声の方を向くスイレン達
いつの間にか水を飲むのを止め、テーブルに肘を置いて手に顔を乗せていた
その顔には小さいながらも、呆れと笑顔を映していた。

「私の自由にしていいんでしょ？
そんな機会、滅多に無いかもしれないんだもの
弱小ギルドでも、少しぐらい手伝ってあげるわ」

トゥライスの言葉に、沸き上がるスイレン達
その中にはコンフォニオの姿もあり、もう仲間のように見える。

「ただし、約束を破ったら出て行くからね
それを肝に免じておきなさい」

トゥライスは起ち上がり、自由気ままに歩き出す
スイレン達は彼女の目的が解らず、黙って着いていった。

トゥライスが向かった先にはギルド長が立っていた
どうやら彼女はギルド長に話しが有るらしい。

「ねぇギルド長、私とそこのコンフォニオ
この2人の存在を登録から抹消してくれないかしら？
私達はフロックスに登録し直すわ」

「そうか、了解した
ではメディックとガンナーの少女達よ、君達をフロックスのメンバーとして登録しよう
君達の名を教えてくれないか？」

エウカリスの時と同じく、新たな名を求めるギルド長
しかし、トゥライスとコンフォニオは黙ったままスイレンを見つめる。

「私達の名前、決めてくれるかしら？」

「新しい自分を始めたいんです」

なんとなく予想をしていたスイレンはすぐに新しい名前を思いつく
見られていた時から、エウカリスの件を思い出したのだろう。

「メディックには、自由を持って明るくしてほしい
そんな君にはアスチルベの名を送りたい」

トゥライスはスイレンの言葉を聞き、ギルド長へと向く
そして、堂々とした姿で己の名を名乗った。

「私の名はアスチルベ！
職業はメディック、ギルド　フロックスのメンバーよ！」

その力強い言葉に、ギルド長は感心の声を僅かに漏らす
どうやらアスチルベの気迫に驚いたようだ。

「ガンナーの君には大胆に、そして勇敢になれるように

そんな祈りを込めて、ナデシコの名を送りたい」

コンフォニオはスイレンの言葉に笑顔を返し、ギルド長を見る
そして凛々しい姿で、己の名を名乗った。

「私はナデシコ、職業はガンナーです
今日からギルド　フロックスに加入します」

これにより、トゥライスはアスチルベとして
そしてコンフォニオはナデシコとして新たにギルドに加入した。

ギルド長は頷き、２人をギルドに登録する
フロックスに３人目、４人目のギルドメンバーが加わった。

しかし、ギルド長の言葉を覚えているだろうか？
世界樹の迷宮に入る時は５人パーティにする方が賢明らしい
それを知っているアスチルベがスイレンに声を掛ける。

「それで、これで４人みたいだけど
残りの１人はどうするの？」

「声は掛けたんだけど、まだ良い返事は貰えてないんだ
明日もまた話すつもりなんだけど……それまで４人じゃ駄目かな？」

エウカリス達はお互いの顔を見合わせ、どうするべきか考える
確かに４人でも迷宮の探索はできるが、やはり危険が大きく伴う
できれば５人での探索を求めるが……

「私は、構わない
治療は大変だけど……頑張る」

「心細いですけど頑張ってみます！」

エウカリスとナデシコは半分無理をした笑顔を見せる
やはり怖いのであろう、それでもスイレンに心配を掛けないようにする
しかし、アスチルベは呆れたように溜め息を吐く。

「別に今日迷宮に入る必要は無いでしょ？
明日、その声を掛けた相手とまた話せばいいじゃない
そして5人になったら迷宮に入ればいいでしょ」

「「「……あ」」」

「（馬鹿……私がしっかりしないと！）」

初心者達の面倒を見るのは自分だと、アスチルベは決意する
もっとも、アスチルベとてまだ初心者と呼べる程度の者である
性格の違いが大きく分かるギルドのようだ。

「まったく、今日は宿に泊まるわよ
明日、また必要な所に行くわ、いいわね？」

アスチルベの言葉に、全員が賛同する
彼女が先頭を歩き、後ろを追いかけるスイレン達
冒険者ギルドの中から出ていったフロックスを見ていたギルド長が
言葉を漏らす。

「……メディックが仲間を率いる姿を初めて見たな」

フロースの宿

アスチルベに案内され、紹介された宿屋は少し小さい宿であった
スイレンは勿論、ナデシコやエウカリスも初めて見るらしい
元々同じギルドに所属していたナデシコが知らない事に、スイレンは疑問を感じた。

「アスチルベ、ナデシコもこの宿を知らないみたいなんだけど？」

「仕方無いでしょ、前のギルドで過ごしてた宿に泊まる訳にもいかないし
宿屋なんてそこら辺に有るんだし、どこでもいいじゃない」

どうやら適当に歩き、見つけた宿に入ろうとしたらしい
それで良いのかと、疑問に感じながらもスイレン達は宿を潜っていく
その宿はフロースの宿という名のようだ。

宿に入ると、ふくよかな体をした４０代ほどの女性が姿を現した
肩にはケープを巻き、その下にはマフラーも巻かれている
青いセーターを着ており、腰からエプロンを下げていた。

「いらっしゃい！
おや、見ない顔だね、アンタ達ウチは初めてかい？」

宿屋の女将はスイレン達を見て初めてだと判断した
もしかしたら彼女は客を全員覚えているのかもしれない
それとも、単に記憶に無い者全員にこう言ってるのだろうか？

「はい、初めてです
こちらの宿に部屋は空いてますか？」

「大丈夫、空いてるよ！
良いんだよ、良く来てくれたね！
この街には宿屋が沢山あるケド、何てったってウチが1番さ！」

女将は本気で言っているのだろうが、部屋が空いている時点で1番
ではないのだろう
それでも自分の宿が1番だと言える女将は、心から自分の宿を愛し
てるのだと思える。

アスチルベとナデシコが泊まっていた宿はフロースの宿より良い宿
だったのか苦笑している
しかしそれは見た目だけの話なのかもしれない
もしかすれば、この宿は他の宿には無いサービスをしている可能性
も有る
そう考えれば女将の言葉もあながち間違いとは言えないだろう。

「アンタ達も冒険者だろう？
他の客もみんなアンタと同じ冒険者だからね、仲良くおやり！」

当然と言えば当然だが、宿に泊まっているのは冒険者だけのようだ
他の客に迷惑を掛けないようにするのは当然とも言える
しかし、仲良くする必要が有るのか、フロックスの者達は疑問に思
ったようだ。

「もし問題なんて起こしたら追い出すからね
喧嘩さえしなきゃ好きに過ごして構わないよ！」

どうやら仲良くしないとしても、何か騒ぎを起こせば追い出すつもりのようだ
気さくな態度だが、おそらく本気でフロックスを追い出すだろう。

フロックスの面々は少し怯えながらも、与えられた部屋へ向かう
部屋は3つ与えられ、1つの部屋にはベッドが2つ、もう1つの部屋には3つのベッドが有る
残りの部屋はその2つの部屋を繋げる通路のような部屋であり、何も無い
少々狭いことが気に掛かるかもしれないが、3部屋も与えてくれたと思うべきであろう。

フロックスは男女で分かれ、ベッドが2つの部屋をスイレンが
ベッドが3つの部屋をエウカリス、アスチルベ、ナデシコ使う事に決まったらしい
荷物を置いた後、フロックスの者達は通路部屋に集まることにした。

「改めて自己紹介をしましょう
私はアスチルベ、メディックよ
前のギルドでは2階まで上ったわ」

「私はナデシコ、ガンナーです
以前のギルドはトゥラ……じゃなくて、アスチルベさんと一緒でした
同じく2階まで上らせてもらいました」

「エウカリス、ドクトルマグスよ
前のギルドでは……1階までしか上ってない
他の人は3階まで行ったって話してたけど」

「最後は僕、名前はスイレンでパラディン
前のギルドでは他の人が世界樹を突破したけど僕は不参加
だから世界樹はこのハイ・ラガードが初めてだよ」

お互いに改めて自己紹介をし始める
しかし、スイレンの言葉に、３人の少女の動きが止まる
スイレンのとある言葉に動揺を隠しきれなかったからだ。

「「「……世界樹を突破？」」」

「うん、まぁ……ユグドラシルっていうギルドなんだけど
知ってるかな？　ギルド長の言葉からそれなりに噂は流れてると思
うけど」

「知ってるもなにも……」

「有名なんてものじゃないんじゃ……」

「噂では、誰もが為しえなかった世界樹の迷宮を完全攻略したと聞
いた」

「完全攻略はしてないよ
集まらなかった道具とかも有るんだし
だけど、樹海の攻略なら終わらせたらしいよ」

「つまり、スイレン自身は役立たずってことね」

ストレートなアスチルベの言葉に呻くスイレン
その様子を楽しそうに見るナデシコ
スイレンが傷付くと思い、アスチルベを止めようとするエウカリス。

こうして集まった冒険者達

彼らはハイ・ラガードに存在する世界樹の迷宮で何をするのか……

0話【新たなるギルド】（後書き）

ユグドラシル？
世界樹の別名という感じでしょうか？
このゲームをプレイする人で、ギルド名にこれを選ぶ人も多いと思います。

フロックスの由来は？
花の名前です
花言葉は「協調」「合意」「あなたの望みを受けます」「同意」「温和」「一致」
ギルドに合うと思い、選びました。

スイレンの由来は？
花の名前です
花言葉は「清純な心」「甘美」「優しさ」「信頼」「純情」「信仰」（白）「純粋」「潔白」
……自分の作品の主人公にしては異質ですね。

アイトムの由来は？
ドイツ語で悪夢を意味します
作者のヒアリング能力は低いので間違っている可能性有り。

コーレアの由来は？
花の名前です
花言葉は「信頼」「互いをよく知る」
スイレンの想いの結果という感じでしょうか？

コバルディアの由来は？

スペイン語で臆病を意味します
作者の（以下略）

エウカリスの由来は？
（略）
花言葉は「気品」「清らかな心」「清心」「純心」「純愛」「爽快」
「清々しい日々」

トゥライスの由来は？
ウェールズ語で暴力を意味します。

コンフォニオの由来は？
カタロニア語で錯乱を意味します。

アスチルベの由来は？
（略）
花言葉は「自由」「落ち着いた明るさ」「恋の訪れ」

ナデシコの由来は？
（略）
「純愛」「大胆」「勇敢」
（濃赤）「野心」
（白）「器用」「才能」
（八重）「燃える愛」

全員の能力、容姿は？
能力は全員ＬＶ１です
容姿はスイレンはパラディン１
コーレアはカースメーカー２
エウカリスはドクトルマグス２

アスチルベはメディック２
ナデシコはガンナー２です
作者の趣味かって？　それは想像にお任せします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5028z/

迷宮探索記録

2011年12月17日00時57分発行